

非娯乐的価値が追求された 日本の近代小説

——先生が文学研究者となつた経緯からお聞かせください。

高校までは野球部に所属し、文学とは無縁でした。将来は中学や高校で野球部の顧問になりたいと思ひ、国語の教員免許を取ることが近道だと考えて、文学部の国文学専攻に進みました。ただ、当時は評論文の読解は自信がありました。文学を本格的に読む経験は初めて。そもそも読書が苦手で、今でも本を読むスピードは遅いし、読み始めると必ず睡魔に襲われます（笑）。それでもどうにか授業についていき、教員免許を取得したのですが、生徒にものを教えるためには何かが必要だと思ひました。それは、そもそも小説とは何か、なぜ学校で小説を学ぶ



小説に託された価値と意義 小説はなぜ必要なのか？

文学部准教授
とみつか まさき
富塚 昌輝

Profile
中央大学文学部文学科
国文学専攻卒業後、中央
大学大学院文学研究科
国文学専攻博士後期課
程修了。博士(文学)。日
本学術振興会特別研究
員や徳島大学総合科学
部准教授を経て2020年
より現職。専門は「国
文学基礎演習」「近現代
文学」など。

のかという問いに対する自分なりの答えを持ち合わせていないことでした。小説が好きなのは「面白いから読む」と答えるかもしれませんが、当時の私には中学や高校で学んだ小説が「面白い」とは思いませんでした。また、若者の読書離れが叫ばれるなか、読書の対象には当然のように小説が含まれますが、私自身「小説を読まないことの何が悪いのか」とも思っていました。小説は「偉いもの」とされるものの、その価値については誰もが納得できる形で説明されていないのではないかと。これが私の中でくすぶっていた問いであり、その答えを探究すべく大学院に進学し、日本近代文学の成立期にあたる明治期に着目した研究に臨みました。

——疑問は解消されたのでしょうか。
明治期の作家である二葉亭四迷は、

自身の著書『浮雲』について、「この小説はつまらぬ事を種にして作った」と言っています。近代小説って「つまらない」ものなのです（笑）。そうすると、当然ながら「ではなぜ小説を書くのか」「どこに読む価値・意義があるのか」という疑問が出てきます。そのヒントになる考えが、二葉亭に影響を与えた坪内逍遙の『小説神髓』にあります。

彼は従来の暇つぶしのための小説を改良し、これからは知識人の眼にかなう小説を作るべきだと主張します。そのためには、小説では人間の心理・社会・文化を写し取らなければならない。そのことを通して「人世」「人生」の有り様を明るみに出すことが、逍遙のめざしたところなのです。つまり、小説をエンターテインメントのコンテンツから押し広げ、知識人が真剣に向き合

うに値するコンテンツへと練り直すことで、小説の社会的地位を高めたいと考えたのです。学校教育で真面目に小説を取り上げるときには、こうした経緯を参考にとると良いでしょう。

読書で複眼的な思考力が養われ 社会全般の理解に活かされる

——研究では、現代においても示唆に富むような発見もありましたか。

私のもう一つの研究テーマは、著名な文学者が活躍した中央文壇や商業出版とは異なる地域文学の意義や役割についての研究です。たとえば、徳島で農業を本業としながら執筆活動をしてきた悦田喜和雄という作家がいました。彼は一時期『中央公論』などに作品を発表していましたが、農村の生活を繰り返し書いたことに対して、当時の批評家から「いつも同じことばかり



書いて！」と評されてしまいます。文壇や商業出版が作品の先駆性や目新しさを求めることは理解できますが、では、「同じことばかり」書くことは無益なのか、どうか。

森鷗外の『キタ・セクスアリス』に「(自分のことを) はつきり書いて見たら、自分が自分でわかるだらう。」という一節があります。自分とは何者か、自分を取り巻く世界とはどういうものかということは、言葉にすることで初めて見えてくるという面があります。一方で、いざ活字化して世に出してみると、これが本当に自分が書きたかったものなのかと戸惑ったりもする。

悦田の小説には、一度書かれた作中人物の性質や思考が、あとで書き直されることがあります。それは矛盾とも

重複とも見えます。しかし、それは彼が書くことで自分の思想を顕在化しつつ、自らを見つめ直していることの現れなのです。現代では、専業作家だけでなく、生活に根差した文学の可能性を探究することも重要な課題です。

重復とも見えます。しかし、それは彼が書くことで自分の思想を顕在化しつつ、自らを見つめ直していることの現れなのです。現代では、専業作家だけでなく、生活に根差した文学の可能性を探究することも重要な課題です。



悦田喜和雄が作品を発表した雑誌。資料を収集しながら悦田文学の全貌に迫る

——推奨される読み方がありますか。

一つの作品を繰り返し読むこと、それも意識的に違う観点から読むことです。芥川龍之介の『羅生門』であれば、まずは下人に着目し、次に老婆の生活に思いをやる。今度は語り手がどのように彼らを描いているかに注意してみよう。同じ作品なのに、見方によって読み取れる内容が変わってきます。それは



●著書紹介
『近代小説(ノベル)という問い
日本近代文学の
成立期をめぐって』
(翰林書房)

近代小説の成立期とされる明治20年前後に焦点を当て、第一部「小説と学問の交渉」と第二部「制度に挑戦する小説」で構成。「近代小説とは何か」「それはなぜ読むに値するのか」について、『出版月評』などの雑誌に見られる当時の批評や、坪内逍遙の『小説神髓』や二葉亭四迷の『浮雲』といった作品を題材に考察が展開される。

今までの自分の読み方が一面的であったことに気づくことでもあります。この姿勢は、世の中の物事を考える際の多角的な視野にもつながるものです。

また、作品の細部を見逃さず、じっくり丁寧に読むことも大切です。現実では、他人のプライベートにずかずか踏み込んだり、無遠慮に人を観察することは失礼にあたります。けれど、小説ではどんなに作中人物を緻密に観察しても、彼らから怒られることはありません。森鷗外『舞姫』の主人公・太田豊太郎は、毎年多くの読者によって彼の言動が根掘り葉掘り吟味され、時には辛辣な評価も受けますが、豊太郎からクレームが来たという話は聞きませんよね(笑)。小説は無防備なものなのです。だからこそ、読者が作中人物の中に自分自身のみつともない姿を見つけたとしても、他人の目を気にすることなく、気負わず、気取らずに自分の似姿を見つめることができる。

そもそも人は心に矛盾を抱え、完全には割りきれない複雑な思いを抱くもの。「昼の思想と夜の思想は違ふ」(森

鷗外『追儺』)とも言われ、昼の思想が規範的・安定的であるのに対して、夜の思想は自由奔放であるかわりに当てにならない。人にも社会にもそうした多面性があつて、どれが欠けてもバランスが崩れてしまうのだと思います。

——学生にはどのような研究者、社会人になってほしいですか。

政治哲学者のハンナ・アーレントは、人間の営みの中で「ア・スコリア」(余裕がないこと)があると、人々の思考はその場しのぎになり、習慣や偏見に依拠することになると言っています。逆に言うと、自分の価値観とは異なる物事を受けとめ、物の見方や考え方の幅を拡げるためには「余裕」や「遊び」が必要なのです。個人の生活や地域・社会の中に、そうした心理的・時間的・空間的な「余白」を積極的に組み込むことが大切です。

社会人になると本当に時間が無くなります。ぜひ皆さんには、学生のうちにうまく時間を工面して、未知の世界に一步を踏み出してほしいですね。